

## 長崎県 農泊体験 報告書

体験者氏名・国籍
中国、マレーシア、パラグアイ
体験日時・場所
2023 11 10-11 対馬市
体験内容 (体験した内容を、写真も含めて、当枠内に記入してください。1~2枚。)
<p style="text-align: center;">1 日目</p> <p>午前 9 時 50 分に対馬空港に着いた時、私たちのガイドの川口さんが迎えてくれた。彼女が私たちを連れて行ってくれた最初の場所是对馬旅行情報センターだ。そこでは、彼女は対馬の歴史の背景と情報を提供し、国境の島としての戦略と重要な役割、そして日本の他の場所では見つからない野生動物を教えてもらった。</p>  <p>それから烏帽子山の頂上に行って、島とその周りの全景を見た。壮観すぎて、私たちはたくさんの写真を撮った。昼食に行く途中、私たちは和多都美神社に行き、そこで自分を浄化し、神社に敬意を表する方法を学んだ。潮の満ち引きではないにもかかわらず、私たちは思わず鳥居が海に立っている写真をたくさん撮った。</p>  <p>昼 12 時 30 分ごろ、私たちは「よしけい」という小さな海鮮料理店でたくさんの昼食を食べました。料理の準備は細部と外観を重視しており、どの具材もとても新鮮で美味しく、シェフは、対馬の農場や水域から食材をできるだけ多く仕入れていると教えてくれた。</p> 



昼食後、私たちは大石農園で農泊体験を始めた。そこで私たちは大石さんに紹介され、すぐに家庭経営のゆず園に向かった。大石さんは私たちにゆずの収穫方法を詳しく指導してくれた。

最初は、これは比較的簡単な作業になると考えていた。しかし、採取軸の延長を維持しなければならない数時間の後、高い枝から果物を取るために、ゆずの木の長くて尖ったとげを避け、作業する際に険しい地形を慎重に横断する——私たちはそれが容易ではないことを認識した。鹿やいのししのような有害種に対処しなければならないことや、予測不可能な気象条件に対応しなければならないことなど、農民としての挑戦も分かった。

約5箱のゆずを集めた後、私たちは摘み取りを終え、空が暗くなる前に地元の記者から短いインタビューを受けた。



夕食、私たちは美味しい家庭料理と地元のビールをいただいた。この家族はわざわざ私たちのために温かい郷土料理の「いりやき」を用意してくれた。中には多種の野菜と骨付き鶏肉が入っている。また、ゆずの果皮から作られた辛い調味料もあり、味はすごく美味しい。家庭料理の味と温かみは私たちに実家を思い出させた。

食事中、私たちは地元のケーブルテレビのニュースも見た。驚くべきことに、約28,000人の人口にとって、地元のニュースは定期的に見られ、依然としてコミュニティの重要なハイライトである。夕食後、歓声と笑いに満ちたカラオケショーが行われた。夕食とカラオケはとても素晴らしかった。これ以上いいことはないと思う。しかし、私たちはそれができると驚いていた！

ゆずのお風呂に入って、自家製の発酵蜂蜜酒を飲み、5年間の自家製梅酒を飲んで、私たちはこの夜を楽しく終えた。このような興奮した夜が終わった後、私たちは興奮して元気に明日が来るのを楽しみにしている。



## 2日目

一晩よく寝た後、私たちは早く目を覚ました。簡単だが、豊富で美味しい日本式の朝食を食べて、残りの時間のためにエネルギーを補充した。

午前9時、私たちはゆずをどのように加工し、どのように慎重に機械を操作するかの説明を聞いた。私たちはゆずを処理するすべての行程を体験できるように、順番に様々なタスクを実行した。変色/不規則なゆずと青果として販売されている美しいゆずを選び、機械を操作して果物から果汁を押し出し、果皮を分離し、種子と果肉を捨てる方法を学んだ。

これらのタスクを実行したり機械を操作したりするのは面白い。これは私たちがゆず加工工場の本当の労働者であることを体験し、感じさせてくれた。

実際、生産場所全体がゆずの香りがして、私たちがゆずのような匂いがして、忘れられない経験をする事ができた。



仕事の途中、私たちは休憩時間にコーヒーを飲み、自家製の柿ジャムを食べた。おいしい！農園での滞在の終わりを記念して、大石さんは私たちに自産の柿を別れの贈り物としてくれた。これは悲しい別れだ。私たちはますます楽しい大石さんと彼の優しい妻が好きになってきたからだ。



川口さんが迎えに来てくれて、私たちは直接地元のそば屋にお昼ご飯を食べに行った。

「Agato-no-Sato」で地元のいり焼きそばを食べてみた。そこで中国におけるそばの起源と、それがどのようにして対馬に到着し、それから日本の他の場所に広まったのかを知った。驚いたことに、対馬そばの作り方、ひいては味は、この島に来てから変わっていない。それを証明することに、私たちの中国の友達はそのそばの味が中国のそばとよく似ているとさえ言っていた。

昼食後、私たちは暗いトンネルで目を開けたことに気づいた。私たちは東洋砲塔遺跡の巨大な古い砲塔の上部に進んだので、そこで第二次世界大戦の歴史におけるその役割を理解した。

残念なことに、曇りのため、釜山市をこの角度から見ることはできなかった。しかし、晴れた日には、人々は建物だけでなく釜山を走る車も見ることができるそうだ。



日本の 100 大ビーチの一つである三宇田ビーチも見たが、寒すぎて海水浴はできないので、岸を歩いて写真を撮をたくさん撮った。ここは絵のような風景で、海水が澄みきって青いので、夏のピクニックや海水浴をするといいところに違いない。



対馬野生動物保護センターの見学をした。ここでは、島に住む野生動物の数を増やす取組をしている。驚いたことに、ツシマヤマネコだけでなく、他の種類の植物や野生動物が対馬でしか発見されておらず、日本の他の場所ではないが、韓国と中国で同じ種が発見されたことを知った。これは対馬が地理的にアジア大陸に接近していることを示している。

隠れた得体の知れない山猫たちを垣間見て、それが直面しているチャレンジ、対馬の自然環境での役割、それを守るための努力を理解した。



私たちは対馬市の「肴やえん」で短い、忘れられない夕食を終え、私たちは一人一人て美味しい海鮮コースを注文した。川口さんが対馬島の文化、歴史、野生動物について深く知っていることをとても楽しんでいるとき、私たちがガイドに最後の別れをしたとき、これはまた悲しい別れだった。

私たちはこの街に戻る飛行機に乗った時、私たちはこの2日間の経験を回顧した。私たちはいつか再び対馬島の田舎生活を体験したいと思っている。

